

《正上内》の地名の由来について

現在、正上内にお住まい皆さんの中にも、《正上内》という地名に、少なからずの疑問をお持ちの方も多と思います。

私も正上内に生まれ育った者の一人として、以前からこの奇妙な地名に関心を寄せておりましたが、先日書店でたまたま手に取った《新編将門地誌》(赤城宗徳著・筑波書林刊)において、正上内の地名について触れていることを発見！ 俄然、興味が増し、私なりにできる範囲内で調べてみる気になり、現在も調査中です。本来なら、まだまだ発表する段階には程遠いのですが、この正上内地区の第1回文化祭の開催で、わかったことだけでもお知らせすることが、皆様からいろいろなお話を聞かせていただける絶好の機会なのではないかと考え、今回敢えて恥を忍んで中間発表をすることにしました。是非、一読され、皆様からの貴重なお話をお聞かせいただきたいと思います。

平成15年11月

正上内1部2班

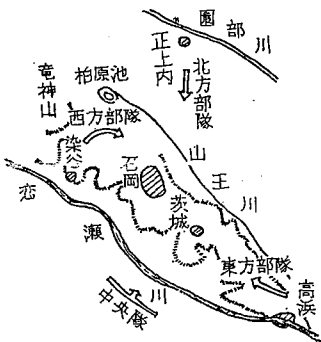
高崎喜一

現在、正上内の地名の由来には2つの説があるといわれています。

《説1》赤城宗徳著 《新編将門地誌三より》

〈小椽内 → 正上内 転訛説〉

1069
時は平安初期、今から1064年前の西暦939年(天慶2年)11月、平将門は、常陸国府(現在の石岡小学校付近)を、東方部隊を高浜から、西方部隊を染谷から、中央隊(南)を恋瀬川対岸(現在の三村付近)から1,000人余の軍勢で包囲し、国府襲撃の時を待っていました。



※新編将門地誌三P193より(石岡攻防想像図)

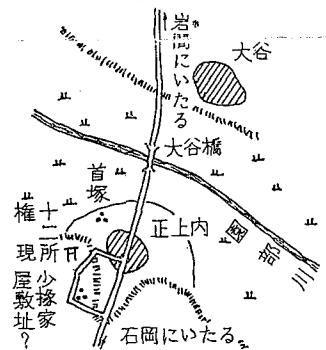
石岡は、恋瀬川と、山王川に挟まれた台地で、東・西・南はこうした大きな川の土手が断崖となり、自然の要害に守られていましたが、北側を流れる山王川と園部川の二つの川には、要害といえるような険しさはなく、防衛上の弱点だったと考えられます。

赤城宗徳氏は、現在の正上内付近は、この北側の防衛上の弱点を補うために置かれた常陸国府の北方の防衛の拠点ではなかったかと推測し、当時の兵力担当の常陸小椽(小椽は、当時の地方役人の役職、現在でいう課長クラス程度)が、相当の兵力を率いて駐屯していたと想定されています。そして、このあたりから、国府への間は、一面の平坦地で兵類を居住させこれを訓練するのに適当な土地であったろうとも言っています。

そして、このとき、国府側の北方部隊を束ねていた、常陸小椽藤原玄茂が将門側に寝返ったこともあって、国府側は大敗を喫し、石岡は町の大半を消失、このとき将門によって朝廷の支配の証である国府の印鑑(印鑑)を奪われてしまいました。この事件によって、将門は反逆者の烙印を押されることとなり、将門の乱(承平の乱)と称される朝廷に対する反乱の口火は切られ、大平の世を震撼させる大事件へと発展していったのです。

その寝返った常陸小椽藤原玄茂の屋敷が、現在の正上内台市営住宅の北側付近にあり、その屋敷内に守護神として十二所権現神社が祀られており、これが現在の正上内権現神社ではないかと思われる。

そして、《小椽屋敷内》が《小椽内》に、そして《正上内》に転訛したものではないかとしているのです。



※新編将門地誌三P189より(現在の大谷橋付近)

《説2》昭和35年深谷重雄著 《石岡府中部落地名考證》より

〈正内(庄内=荘園内)の小高い部分か… 土地の歴史的支配と地理的要因説〉

《原文》

この地には寺があったような跡もなく神社としても目立つものはなく、昔或る人の氏神家を村人が権現さまとして祭り、鎮守としたというだけのもので、村名(正上内村)についてもかかき合えずはつきりしない。考えふるに、新誌云正は庄なり、とあれば庄内の高い部分がこの村かとも解され、正上内と名づけしかと思われる。庄内とすれば、誰の領内か、北の谷に長者塚あれば長者の領内か、部落の名起り定かではない。

《解釈》

(正上内がジョウジョジと発音されることをうけて)寺があったような跡もなく、神社としても目立つものもないが、(現存する《権現さま》に関連して)、昔、或る家の氏神を村人たちが権現さまとして祭り、これを村の鎮守としたのではないかと考えられるが、どちらにしても、正上内の地名の由来には関係がなさそうだ。

ある地名の本によれば、正という字は庄(庄とは、荘園の略)の簡字化であろうという説があるので、庄の内の高い部分という意味で、《正上内》としたのではないかと考えられるが、庄内(荘園内)ということならば、だれの荘園だったか、ということが問題になるが、これは不明であり、この部落の地名の由来は依然わからない。

この説では、いろいろ正上内という地名から連想されることや言い伝えなどから、地名の由来を解釈してみようと試みても結局不明であると結論付けられており、はなはだ消化不良の感が残ります。

《権現神社と正上内との関連について》

正上内の権現さま《正上内権現神社》には、現在何の由緒書きも残されておらず、実際のところは何もわかっていません。

実際のところ《説2》でご紹介したように、特に何の由緒も持たない村人の氏神を《権現さま》として祀ってきたものに過ぎないのかもしれませんが、赤城宗徳氏の著書の中では、その出自は不明ですが《十二所権現神社》と記述されています。

赤城氏は、上記の《説1》で紹介したように、常陸小掾藤原玄茂が屋敷を正上内の地に構えるにあたって、守護神として十二所権現を祀ったのではないかの説を唱えています。

しかし、十二所権現の発祥は平安中期以降（11世紀）であり、平安初期のこの時代では歴史的な矛盾を生じてしまい、藤原玄茂と権現様との関係は薄いのではないかと私は考えています。

藤原玄茂との関係はないにしても、実際、《正上内権現神社》が《十二所権現神社》の末社であるか否かは、今のところ不明のままです。

しかし、私は、この十二所権現について調べているうちに、この正上内に或いは関連してくるのではないかと考えられる、ある興味深い記述をみつけました。

《十二所権現神社》とは、熊野山中にある熊野詣の道中にある十二ヶ所の神社を言います。そして、熊野十二所権現の本宮を《証誠殿》、祭る神様を《証誠権現》というのです！

証誠権現 — 小塚内 — 正上内

（注）権現とは、神仏が多くの民のために、我国に神として現れたこと、または、その現れた神そのものを言います。

ただの偶然とも考えられますが、この《ショウジョウ》という音に、何か関連があるのではないかと考えさせられはしないでしょうか。

《追記》古文書からみる正上内の歴史

石岡市が所有する史料にも古くから《正上内》の地名は出現しており、ここからも歴史のある地名だということがわかります。

正上内は西暦1657年（明暦3年＝江戸で起きた振袖火事（明暦の大火）と同年）にはすでに地名として出現しています。少なくとも今から346年前には、すでに《正上内》という地名が存在したのです。

また、元禄13年（西暦1700年、忠臣蔵の討ち入りは元禄15年）には、正上内新田開発の覚書が残されており、家数10軒、人数38人（うち男23人、女15人）の記述もみえます。

以下史料をそのまま掲載します。

- ① 元禄13年（1700）の「府中平村香丸組明細覚」に「正上内村新井橋土橋壱ヶ所、池溝土橋三ヶ所、中溝土橋三ヶ所、橋数拾ヶ所、右是迄正上内分、此新田当年迄に四拾四年に罷成に御座候」の記述あり、また同史料所収「香丸平村百姓覚書」に「正上内に松山山主阿ら宿勘右衛門くみ久左衛門、同「香丸新田家数覚」に「正上内新田 家数拾間此人数三拾八人（内式拾三人男、拾五人女）の記載あり。
- ② 「平村古今抜要集」に「松平伊豆守様御領之節明暦三酉年正上内新田開く」の記述あり。
- ③ 明治11年（西暦1878年）の「常陸茨城郡府中平城往古記事並諸記録」所収「府中新田場開墾年代記」に「正上内新田明暦三酉年ニ出来、松平伊豆守公代」の記述あり。
- ④ 正上内弁才天 正上内に在り、祭神は市杵嶋姫命、田心姫命、湍津姫命の三神にして、毎歳陰暦九月十九日を以て祭日とせり

（明治43年 石岡誌）

300年以上も前からこの地に住まい、新田開発に汗を流した人たちが実際に存在したという歴史的事実は、なにか感慨深いものがあります。

誠に簡単ですが、以上が、私が本日までに調べた正上内の地名に関連するすべてです。

ここ正上内で子供時代をすごしたことがある方は、他の地域の子供たちから「しょ、しょ、しょうじょうじのタヌキ囃子～」とバカにされた思い出をお持ちの方もおいのではないのでしょうか。

正上内という地名は、ナゾだらけ地名です。

ですが、決してタヌキ囃子ではなく、歴史のある由緒正しい地名であることを次世代に残すのも、われわれ、現代正上内に住む者の使命ではないかと考えています。私は、引き続き、正上内の地名の由来について調べていく考えですが、皆様の中にも正上内の由来や関連するお話をご存知のかたがいらっしゃればぜひともお知らせいただきたいと思います。

以上